

# 女性クラブがローラ・インガルス・ワイルダーに与えた影響

高野 弘子

## 1. はじめに

ローラ・インガルス・ワイルダー (Laura Ingalls Wilder, 1867-1957) は、「小さな家」シリーズ (*Little House books*) を出版する以前の、1910年代から1920年代にかけて、記者として農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』 (*Missouri Ruralist*) の記事を書いた。筆者のこれまでの研究で、農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』の記事を書くことを通して、ワイルダーは革新主義運動の一つである農村生活運動に深く関わり、このことが、後のワイルダーの代表作となる「小さな家」シリーズに、農村教育の視点を織り込むという影響を与えていることがわかっている。革新主義時代のワイルダーは、農業新聞の記者として、農村生活運動に関わる一方で、女性クラブにおいても積極的に活動していた。ワイルダーと女性クラブについては、ウィリアム・アンダーソン (William Anderson)、キャロライン・フレーザー (Caroline Fraser)、ジョン・E・ミラー (John E. Miller) の3人がそれぞれ、彼女についての伝記の中で触れている。

アンダーソンによれば、ワイルダーは、ハートビル (Hartville) のアセニアンクラブ (Athenian Club) と、マンスフィールド (Mansfield) のジャスタミアクラブ (Justamere Club) に参加した (*Mansfield* 11)。ワイルダーが1916年の創設から関わっているアセニアンクラブは、会員の教育的経験と友情を育むために組織され、巡回図書館の設立を目標に掲げていた (*Biography* 184)。ワイルダーのアセニアンクラブへの参加は生涯続き、彼女が亡くなるまで、彼女の名前は名簿に掲載された (*Reader* 123-24)。フレーザーによれば、アセニアンクラブは、1916年に文化的トピックについて意見を交換する勉強会として、ワイルダーがエラ・クレイグ (Ella Craig) と共に創設し、クラブ名はギリシャの知恵の女神にちなんで名付けた (242-43)。1920年にワイルダーは、ジャスタミアクラブの会長を務めた (267)。ジョン・E・ミラーによれば、ワイルダーは1919年頃から、『ミズーリ・ルーラリスト』の家庭欄に定期的にコラムを連載するようになるのだが、時を同じくして、以前にも増してクラブ活動に積極的に関わり、アセニアンクラブとジャスタミアクラブの勉強会の中心的な役割を担うようになった。ワイルダーは地域での活動に力を入れ、1920年代には、彼女の社会生活はクラブ活動が中心となっていた (128)。ジャスタミアクラブは、1か月に1度、火曜日の午後に会員の家を集まって開催されたが、ワイルダーはほとんど欠席することが無かった。また、外国から自宅に戻った娘のローズ・ワイルダー・レイン (Rose Wilder Lane, 1886-1968) を連れてクラブに参加す

ることもあった(159)。ワイルダーは、1925年2月には、ジャスタミアクラブとアセニアンクラブの両方のメンバーとその夫を自宅に招待し、20年前の衣装を着て、キャンドルライトを用い、昔のゲームを楽しむ集まりを企画している(159)。

以上の先行研究から、農業新聞の記者をしていた頃のワイルダーは、女性クラブ活動にも積極的に関わっており、特に1920年代には、彼女の社会生活はクラブ活動が中心となっていたことがわかる。したがって、農村生活運動が彼女の代表作「小さな家」シリーズに農村教育の観点から影響を与えていたのと同様に、革新主義時代にワイルダーが関わったもう一つの活動である女性クラブも、同シリーズに何らかの影響を与えたと考えられる。先行研究では、ワイルダーが女性クラブに参加したという事実が、伝記の中で触れられているのみであることから、本小論では、当時の女性クラブの動向、ワイルダーの女性クラブでの活動、彼女の書いた農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』の記事及び彼女の作品の分析を通して、女性クラブが彼女にどのような影響を与えたかを探ることをその目的とする。なお、ここで分析するワイルダーの『ミズーリ・ルーラリスト』の記事は、ミズーリ州立大学コロンビア校(University of Missouri, Columbia)のエリス図書館(Ellis Library)に保管されているものを2007年にスティーブン・W・ハインズ(Stephen W. Hines)が忠実に再現し転記した『ローラ・インガルス・ワイルダー：農場ジャーナリスト』(*Laura Ingalls Wilder: Farm Journalist*)を用いる。

## 2. 女性クラブがワイルダーに与えた影響

### (1) 高等教育の機会を女性クラブから得たワイルダー

ワイルダーの自伝的小説である「小さな家」シリーズの最終巻『この楽しき日々』(*These Happy Golden Years*, 1943)の「学校の日々の終わり」(“School Days End”)の章には、主人公ローラが学校生活を終える日の描写がある。ローラは再び開拓地の学校で教員として働くことになり、オーエン先生(Mr. Owen)に別れの言葉を述べる。オーエン先生は、任期を終えた秋にはローラが学校に戻ってくると思っていた。ところが、ローラは、任期を終えた後はアルマンゾ・ワイルダー(Almanzo Wilder)と結婚するので、もう学校には戻らないと告げる。オーエン先生は、全員を一緒に卒業させたかったため、ローラの卒業を引き延ばし、この春卒業させてあげなかったことを詫言。ローラは、「大丈夫です。卒業できていたはずだということがわかってうれしいです」と述べ、学校を後にするという場面である(236-37)。当時のワイルダーは、新しい学校で再び教えることに対する緊張感と、アルマンゾとの新しい生活に胸を膨らませ、高校卒業資格を得ることができなかったことをそれほど深く考えないでいたのかもしれない。

それから20年以上の歳月が経ち、子育ても終え、中年となったワイルダーは、夫と農業を営む傍ら、農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』の記者となる。1918年に、同新聞の編集長であるジョン・F・ケース(John F. Case)が、「ワイルダー夫人を訪ねよう」(“Let’s

Visit Mrs. Wilder”）というタイトルでワイルダーに関する記事を書いている。その中でケースは、ワイルダーが、「私の教育は、フロンティアで暮らす少女が得ることができたものにすぎず、高校に2学期通っただけで、卒業はしていません」と述べたことを紹介している（Anderson, *Sampler* 11）。

この頃、家事用品の発達により自己修養と呼ばれる時間を持つことができるようになった中流階級の女性の中で、高等教育を得ていた者たちは学びを続けてさらに知性の地平線を広げることに興味を持ち、一方、公式な教育を十分に享受できていなかった者たちは、自分自身を教育する方法を探った。これらの目的を達成するために女性たちは、アメリカの至る所で、学習クラブ（study clubs）や読書サークル（reading circles）を始め、これが女性クラブへと発展していった（Watson 254）。高校を終えることができず、公式な教育を十分に享受できなかったワイルダーは、「中年女性の大学」（“Middle-Aged Woman’s University”）（Seaholm 93）とも呼ばれる女性クラブに、自分自身を教育する機会を求めたと考えられる。

ワイルダーは、農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』の記事の中で、学ぶことの喜びについていくつかの記事で触れている。1917年1月20日の記事では、新しいことを学ぶことは素晴らしいことであり、学ぶのに年を取り過ぎているということはないことを伝えている（Hines 98-99）。1917年2月20日の記事では、ワイルダーの友人について紹介している。ある友達は、ピアノを弾くのだが、毎日休むことなく練習を続け、日に日に上達している。別の友人は、歌うのが上手であったが、忙しくて練習する時間が無いかからと練習せずにいたところ、美しい歌声がもう出せなくなってしまった。別の友人は、教育を完成したとして、それ以上学ぼうとしなかった。かつては、ワイルダー以上に多くの知識を持っていたのだが、その知識はどんどん忘れられていってしまった。ワイルダーはこれらの例を示しながら、私たちの資質は、成長するか縮んでしまうかであるとし、学び続けることの大切さを読者に訴えている（Hines 101-03）。

ワイルダーは、1914年2月5日の記事で、女性クラブの設立を可能にした背景について触れている。かつては都会にしかなかった女性クラブが、今では、農村でもクラブ活動に参加ができるようになったとしている。その理由として、州立大学の読書コース（Courses of Reading）や、農村女性の世界会議（International Congress of Farm Women）がクラブ活動の運営や計画の立て方について、助言や援助を与えてくれるからだと説明している（26-27）。ニューヨーク州のランドグラント大学（land-grant university）であるコーネル大学（Cornell University）で行われていた当時の読書コースについて、タマル・ウエインストック（Tamar Weinstock）は、「クラブのための計画手順」（Plans for Clubs Study）を記した会報を出し、どの様にしたら女性たちが自分たち自身のクラブを形成できるかについての詳細な情報を提供すると共に、規則の作り方や1年間のプログラムの例を提示し、農村女性にクラブ活動を奨励したとしている（2-7,9）。ワイルダーが女性クラブを創設及び運営できたのは、ミズーリ州においても、

ランドグラント大学であり、農学部と家政学部を有するミズーリ州立大学から、コーネル大学の読書コースに匹敵する援助を受けることができたことによると考えられる。

また、ワイルダーは、1924年4月1日の記事で、女性クラブにおいて、テーマが音楽という回に、自らが発表者の番になった時のことを紹介している。ワイルダーは、特別に楽器を演奏するわけでもなく、集まりなどで皆と一緒に歌を歌う程度であり、テーマに沿っての発表の準備に最初困ったが、音楽の表記がいつから始まったかについて調べていくと、面白い発見があったとしている。音楽が表記されるようになったのは、16世紀にさかのぼり、牧師が教会の少年合唱団にラテン語の曲を教えるときに、線を用いて曲の抑揚を示したのが始まりで、その後、音符が発明されていったと説明している。そして、女性クラブで発表するための準備をすることがきっかけで、新しい知識を加えられたとし、学ぶことは最も魅力的なことで、学び続けることは人生に喜びを添えるとまとめている (Hines 307-308)。

1910年代になると、各州立大学の読書コースからの援助の他にも、女性クラブの設立のガイダンスとなる本も出版され始める。これらの書籍は、女性クラブの開設方法について詳細で実践的な説明を施している。具体的な内容としては、クラブを組織するためには、同じことに興味関心を抱いている10人から12人の近隣の住人や友人をリストアップして、最初に小さな読書サークル、あるいは学習サークルを作り、人数が集まったところで、会長、副会長、世話係を決め、次にクラブのルールを決め、委員会を開設すると書いている。また、委員会は年間プログラムを作り、委員長は次回の会合の日時と場所を会員に伝えるという手順でクラブを進行すること、各回は年間計画に沿って、発表者がテーマについて発表し、その後、皆でディスカッションをするとしている。発表者は、それぞれのテーマに沿いながらも、自らが興味関心のあることを取り上げることにより、他の参加者にとっても、新鮮で魅力的な内容となり、活発なディスカッションがなされることが期待できると説明している (Benton, *Woman's Club Work* 11-23)。また別の手引書では、クラブで学習するテーマを具体的に提案している。プログラムの内容として、家政学と純正食品 (Home Economics and Pure Food)、市民的社会的慈善事業 (Civics and Social Philanthropy)、教育 (Education)、公共の健康 (Public Health)、環境保護 (Conservation)、芸術 (Art)、音楽 (Music)、文学研究 (Literary Studies)、旅行学 (Travel Studies)、その他のプログラム (Miscellaneous Programs)、クラブの感想 (Club Sentiments) といったテーマを章立てしながら、それぞれについての学習会の展開方法の説明がなされている (Cass 1-157)。

ランドグラント大学での読書コース及び、当時出版された女性クラブの手引書から、当時の女性クラブの動向の特徴が浮かび上がってくる。1つ目の特徴は、女性クラブが、会長、副会長、世話係を持つ組織化された集団であったことである。2つ目は、女性クラブは規則を持ち、委員会により年間計画が立てられ、活動が1年間の見通しを持って運営されていたことである。3つ目は、特に農村女性の参加が奨励されていたことであ

る。4つ目は、学習内容は、大きなテーマを掲げ、それに関わる科目を学ぶという形式で、系統的に学習されていたことである。高等教育に準ずる広範囲で高度な内容の題材が学ばれ、発表者は、女性クラブで取り扱われるテーマに沿って発表するため、そのテーマについて深く調査・研究した上で、発表の準備が求められると共に、参加者全員が討論に参加することが望まれており、女性クラブの活動内容は、想像以上に学術的であったと考えられる。前述のワイルダーの記事の中でも、音楽がテーマの学習会での発表の順番が回ってきて、その準備に苦労しながらも、題材に沿って調査・研究することを通して新たな発見をし、それをクラブ女性たちと共有できたことに対する彼女の充実感が表現されている。

前に述べた編集長のケースは、ワイルダーの紹介文の中で、「彼女の『ミズーリ・ルーラリスト』への貢献度から、多くの読者は、間違いなくワイルダーは大卒であると判断するだろう」と述べている（Anderson, *Sampler* 11）。ワイルダーは、女性クラブの活動を通して学び続けることで、大卒レベルの見識を持っていると他者から判断されるほどにまで、自らを高めていったと考えられる。したがって、女性クラブがワイルダーに与えた影響の1つ目は、中年女性の大学と呼ばれた女性クラブへの参加を通して、高等教育を受ける機会を得たことにより、自身の見識を高めたことが挙げられる。そして、知識と同時に、女性のみでクラブが運営されたことにより、自ら組織を作りそれを運営していくという社会的能力も培ったと考えられる。

## (2) 農村リーダーとしての成長を促した女性クラブ

アンダーソンは、ワイルダーが1916年の創設から関わっているアセニアンクラブが、巡回図書館の設立を目標に掲げ、その実現のために努力したとしているが（*Biography* 184）、ポーラ・D・ワトソン（Paula D. Watson）は、ワイルダーの活動と同時代である19世紀末から20世紀初頭にかけての、アメリカにおける無料公立図書館への女性たちのボランティア活動について検証している（233）。ワトソンによれば、女性たちの学習クラブや読書サークルを作るという現象は、特に東部において、組織的で意図的に発展し、女性クラブ総合連盟（General Federation of Women's Clubs）の形成を導いた。女性クラブ総合連盟は、アメリカ全土に多くの小規模クラブの形成を促した（234）。1890年からは隔年で会合が開かれ、3回目の会合を開いた1896年までには、社会の向上という課題にも取り組むようになり、図書館は初期の目立った課題となった（234-35）。女性クラブ会員たちは蔵書を集め、それを他のクラブの女性やコミュニティーの人々と共有することを試みた。ほどなく、彼女たちは、もっと広い範囲で蔵書を共有することに興味を持つようになり、女性や子どもたちのために、読み物へのアクセスが非常に制限されていた遠方の地域へも蔵書を送り始めた。こうして、個々のクラブや州のクラブは、本が贅沢品であった人々のために、巡回図書館を組織していく（235）。いくつかの中西部の州では、図書館拡張活動の州のサポートが確立するのに時間がかかったため、クラ

ブ女性が、彼女たち自身の時間、エネルギー、慈善活動により、何年もの間、巡回図書館の組織を継続させた(242)。1933年にアメリカ図書館協会(American Library Association)は、当時存在した全米の図書館の75%の発案は、女性クラブによるものであったと報告している(235)。

ワトソンの先行研究から、19世紀末から20世紀初頭にかけて、最初女性クラブは、自分たちの活動のために蔵書を集め、それをだんだん他のクラブやコミュニティーへも供給するようになり、それがさらに本へのアクセスが難しい地域への巡回図書館の組織へと広がっていったことがわかる。ミズーリ州マンスフィールドは、本へのアクセスの難しい農村地帯であったことから、コミュニティーのための巡回図書館の組織が必要であり、ワイルダーは自らが所属する女性クラブと協力して、設立に尽力したと考えられる。アンダーソンは、アセニアンクラブの月1度の学習会で、様々なプログラムが営まれる中で、ワイルダーが、特に、文学のプログラムを好み、ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-1870)、サー・ウォルター・スコット(Sir Walter Scott, 1771-1832)、マーク・トウェイン(Mark Twain, 1835-1910)などについても学習したとしている(*Biography* 184)。巡回図書館の設立は、女性クラブ活動を円滑に行うことに貢献したばかりでなく、書物に身近に触れられる機会を農村女性や子どもたちに与え、農村生活の向上にも貢献したと考えられる。

また、アンダーソンは、ワイルダーが農村女性のための休憩室(rest room)の設立にも尽力したとしている(*Biography* 184)。アンダーソンによれば、農村女性の生活を高めることに懸命に取り組んでいたワイルダーは、たまに町に出かける時、夫が商人や銀行員の所を回って訪問している間、不機嫌に馬車に座ってじっと待っているという孤独な農家の妻のイメージをひどく嫌った。そこで、女性クラブ活動の一環として、集会場(meeting room)や休憩室を設立した(*Sampler* 97)。1910年代、クラブ女性たちは、自己修養を行いながらも、その一方で、病院の必要性や、町に来た時に使う農村の女性たちのための休憩室についての討論を始めた(Winter 639-640)。農村部の女性クラブ会員が増えるにつれ、農村女性のための休憩室の設置の気運が高まる中でワイルダーは、自らの地域での休憩室の設置に率先して取り組んだと考えられる。ワイルダーは、土地会議(Land Congress)で、ミズーリ州の女性クラブが大きな努力を払ったことにより、休憩室が各地に設立され、町のソーシャルセンターとして、また快適な休憩場所として活用されることになったことに対して、大きな報いと喜びを感じるというスピーチをしている(*Sampler* 96-99)。

したがって、最初は学習会としてスタートした女性クラブは、徐々に社会の向上という課題にも取り組むようになり、ワイルダーらに巡回図書館や農村女性のための休憩室を設立することを導いたと考えられる。ワイルダーは女性クラブ活動を通して、農村の生活向上にも貢献しており、これらの活動は、農村生活運動と強い関連を持っていると

考えられる。前述のコネル大学の読書コースは、同大学の家政学部に所属するマーサ・バン・レンセラー（Martha Van Rensselaer, 1864-1932）により運営された。レンセラーが『農夫の妻たちの読書コース』（*Farmers Wives' Reading Course*）という会報を1901年1月から出すようになったのは、革新主義時代に全米の農村生活運動を中心となって推進した同大学農学部教授のリバティ・ハイド・ベイリー（Liberty Hyde Bailey, 1858-1954）から求められたことに由来する（Weinstock 5）。ベイリーは、レンセラーの直接の上司であり、同会報には、制作責任者（director）としてベイリーの名前が明記されている。州立大学の読書コースと女性クラブのつながりは、女性クラブと農村生活運動の接点でもあった。

1920年3月20日の『ミズーリ・ルーラリスト』の記事でワイルダーは、workには2つの種類があるとしている。小文字で始まるworkは、必要に迫られてやらなければならない仕事であり、生きていくためにする仕事である。しかし、すべてのエネルギーをこのworkに注ぐと、人は自分本位で、小さく、そして意地悪になる。これに対して、大文字で始まるWorkは、報酬を得ることなしにコミュニティーのためにする善い行いである。このWorkは、コミュニティーの人々を愛し、コミュニティーの向上を願う仕事であり、私たちの魂を生き生きとさせる。Workに携わることは、自分本位に陥ることなく、人生をより豊かにすると訴えている（Hines 217-18）。クラブ活動を通して身につけた技術は、クラブ女性たちに自信を与え、政治的仕事をする基盤を培い（Hobbs 78）、彼女たちを、国内の何百もの改革プロジェクトを支援する改革者へと成長させた（Hobbs 15, 89）。そして、クラブ女性たちは、自分たちを社会運動の指導者として自覚し、公共の指導者としての役割を引き受けていった（Seaholm 527-28）。コミュニティーに巡回図書館を新設したり、農村女性のための休憩室を設置したりすると共に、農村生活運動に積極的に関わったワイルダーの活動は、彼女の言うWorkを指していると考えられる。したがって、2つ目の女性クラブがワイルダーに与えた影響は、彼女が革新主義者として公共の分野へと進出するための技術と基盤を訓練し、農村のリーダーとしてのさらなる成長を促したことにあると考える。

### （3）女性クラブがワイルダーに与えたイデオロギーの影響

#### ①第一次大戦の肯定

ワイルダーは、『ミズーリ・ルーラリスト』に戦争に関わる記事をいくつも書いている。1917年5月5日の記事では、ジャガイモやトウモロコシを植え、牛の乳を搾り、子牛や豚を育てて、毎日少しでも多くの卵、肉、野菜を生産することが、戦争の前線を後方で支えることになる伝えて（Hines 108-109）。1917年11月20日の記事では、女性も、軍隊に入れない人も、今回の戦争に家にいながら協力することができることを示した後、アメリカは、フランスから求められた砂糖を送ることができないでいることを知っていると尋ねている。フランスやベルギーのサトウダイコンの農場や精製所は敵に破壊され

てしまい、人々は砂糖に飢えているのだが、送ることができないと説明している。私たちが、各家庭で少しずつ節約すれば、全体としては大きな量となるのだから、小麦、肉、砂糖を兵士に供給すると共に、海を越えた隣人であるベルギーやフランスにいる空腹な女性や子どもたちに分けてあげられるように節約しようと訴えている (Hines 128-129)。1918年5月5日の記事では、すべての戦争は、女性の戦争でもあり、世界中の女性が、戦争における自分たちの役割を果たしているとしている。そして、ロシアの前線で敵と戦った女性たちや、時に応じて料理人、運転手、交通警官、担架運搬人、墓掘りとして仕えたアメリカの赤十字の女性たち、戦争に自分の子どもを送った母親たちについて言及している (Hines 145-147)。

なぜ、ワイルダーは戦争に関する記事をいくつも書いたのか。デュボイスは、『女性の目からみたアメリカ史』の中で当時の女性の動きを説明している。最初、全国アメリカ女性参政権協会 (NAWSA) の会長、キャリー・チャップマン・キャット (Carrie Chapman Catt, 1859-1947) は、戦争に反対していた。ウィルソン大統領も中立を望んでいたが、大西洋においてドイツがアメリカ船も含めた無差別潜水艦攻撃を開始したことにより、アメリカは1917年4月6日、宣戦布告した。自分の国が戦争に参加していない時と、戦争をしている時とでは事情が異なり、戦争に反対していた女性たちは忠誠心に欠けると非難され激減した (484-87)。ウィルソン大統領 (Thomas Woodrow Wilson, 1856-1924) は、「合衆国の役割を理想主義的に描き、第一次世界大戦は、アメリカの理想を世界に広める民主主義のための戦争だ」と主張した (488)。このような状況の中で、前述のキャットは平和の主張を翻し、戦争を支援することは、愛国心と市民権を示す良い機会であると考え、全国アメリカ女性参政権協会を指導し、州と地域に設置した支部において、女性クラブを始めとする女性団体を動員し、自発的な働きかけを促した (488-89)。女性の戦争協力活動は多岐に渡り、肉、砂糖、小麦の節約の推奨や、「アメリカ赤十字によって組織された数千人の女性たちが、フランスの戦場で看護婦や救急車運転手として奉仕した」 (489)。前述の通りワイルダーは、これらの活動を『ミズーリー・リーラリスト』の記事に掲載している。

一方で、デュボイスによれば、モンタナ (Montana) 州の女性参政権運動家のジャネット・ランキン (Jeannette Rankin, 1880-1973) は、1914年に初めて下院に当選した女性であったが、「正式な宣戦布告を反対した56人の議員の1人であった」 (486) ため、議席を失っている。エミリー・グリーン・バルチ (Emily Greene Balch, 1867-1961) は、「戦闘要員として若い男性を徴兵する政府の権利を批判して、ウェルズリイ大学 (Wellesley College) の経済学の教授職を追われた」 (486)。ケイト・リチャーズ・オヘア (Kate Richards O'Hare, 1876-1948) は、「母親が息子を戦争に強制的に取られることに反対するという、数年前までは一般的だった感情を表現したことで、5年間連邦刑務所に収監という判決を受けた」 (486)。彼女たちの抗議は、「裏切り者の行為とみなされた」 (487) のである。現代の感覚では、ランキン、バルチ、オヘアらの考え方により共感できる。



しかし、当時、彼女たちは忠誠心に欠けると非難され、戦争に反対する女性は激減するという時代背景の中で、ワイルダーは、世論や女性クラブからの影響から、戦争を肯定する記事を書いたと考えられる。

## ②人種の壁

女性クラブは排他的な機関であり、似たような背景を持つ女性たちが集まる傾向があった。主流の女性クラブは、白人でプロテスタントの女性たちによって構成され、ユダヤ人系の女性やアフリカ系アメリカ人の女性は、それぞれの女性クラブを組織しており、人種や宗教により女性クラブの加入に制限をもたらした。したがって、黒人女性が白人女性のクラブへの入会を拒絶されるなど、女性クラブ活動の中にも人種差別が存在した（デュボイス 350）。女性クラブと同時期に活動していた白人セツルメントの指導者の多くも、「個人的には人種的公正を信じていたが、当時の偏見に屈して、自分たちが設立した組織において人種隔離を行っていた」（デュボイス 417-18）。この傾向は、南部ばかりではなく北部でもあり、「科学的だと主張された人種的ヒエラルキーの理論によって強化された」（デュボイス 460）人種の壁があった。ジェニファー・R・ラング（Jennifer R. Lang）は、ノース・カロライナ州（North Carolina）の女性クラブであるソロシス（Sorosis）の活動について、会員は白人の上流・中流階級の女性に限られ、プログラムは、女性クラブ会員たちの人種や階級に対する認識や価値を反映しており、女性クラブ活動は人種差別のイデオロギーを支持し、実践していたとしている（5-6）。したがって、当時の女性クラブでは、時代の価値観が大きく反映されていたことがうかがわれる。

また、女性クラブ総合連盟は、1896年のプレッシー対ファーガソン裁判の判決（*Plessy v. Ferguson Supreme Court decision*）による「分離するが平等」（“separate but equal”）という法則を支持した。1900年、女性クラブ総合連盟は、ジョセフィン・ラフィン（Josephine Ruffin）の率いるウーマンズエラクラブ（Woman's Era Club）がアフリカ系アメリカ人のメンバーを含むことに気づかずに加入を受け入れたのだが、発覚後、受け入れを取り消した（Hobbs 11）。アリソン・M・パーカー（Alison M. Parker）は、革新主義時代において、女性クラブ、改革者、労働者、フェミニストたちは、公的・政治的分野への参加の権利を主張し、教育の向上、社会の向上、より良い労働条件の獲得を目指したが、多くの改革者やフェミニストたちのゴールであった経済的正義、人種の平等、女性の開放などは実現されないまま、次の世代の女性たちに残された課題となったとしている（130）。

白人の改革主義者たちの盲点であった人種差別という残された課題は、ワイルダーが、『ミズーリ・ルーラリスト』の記事を書くことをやめた数年後に発表した代表作「小さな家」シリーズ（1932-1943）にもその影を落とした。1952年、同シリーズを出版したハーパー社（Harper & Brothers）は、第3巻『大草原の小さな家』（*Little House on the*

*Prairie*, 1935) 中にある表現に対しての抗議の手紙を受け取った。指摘のあった箇所は、第1章のオープニングの部分で、「そこでは、人が見ることができるよりもずっと遠くに伸びた牧草地の中を野生動物が歩き回り、草を食べていた。人々はおらず、インディアンだけがそこに住んでいた」(Hill 190) と表現されている。問題とされたのは、「人々はおらず、インディアンだけがそこに住んでいた」という表現である。当時、ハーバー社の児童文学部門の編集長をしていたアーシュラ・ノードストローム (Ursula Nordstrom, 1910-1988) は、この読者の手紙と、それについての彼女自身の見解をワイルダーに郵送した (Marcus 53-55)。ノードストロームから報告を受けたワイルダーは、「『大草原の小さな家』の中の間違いについての指摘は、全く正しく、あなたが提案するように修正することに対して同意します。私の愚かな過ちでした。もちろん、インディアンは人間であり、そうではないと意図するものではありませんでした」(Anderson, *Selected Letters* 343) と返信し、インディアンはもちろん人々であり、私の愚かで不注意な間違いであったとして、『大草原の小さな家』の改訂に同意している。改訂された本文は、「そこでは、人が見ることができるよりもずっと遠くに伸びた牧草地の中を野生動物が歩き回り、草を食べていた。入植者はおらず、インディアンだけがそこに住んでいた」(2) となり、「人々 (people) はおらず」が「入植者 (settlers) はおらず」と修正されている。

ワイルダーは愚かで不注意な間違いと称しているが、指摘された部分の表現は、執筆当時の彼女のネイティブ・アメリカンに対する考えが無意識のうちに表れてしまったと考えられる。実際に、この後も、ワイルダーのネイティブ・アメリカンに関わる描写表現について、マイケル・ドリス (Michael Dorris) を始めとして、今日に至るまで批評が続いている。たとえば、アメリカ図書館協会 (ALA) とアメリカ図書館協会の児童サービス部会 (Association for Library Service to Children, ALSC) は連名で2018年6月に、1954年以来、アメリカで出版され時代を超えて児童文学に寄与してきた本に贈られるローラ・インガルス・ワイルダー賞 (The Laura Ingalls Wilder Award) の名称を児童文学遺産賞 (Children's Literature Legacy Award) と改名することを発表した (ALA news)。名称の変更の理由は、「ワイルダーの作品は児童文学史上、また個々の読者にとっても大変意義深いものであるとした上で、ワイルダーの作品は自身の人生経験や1800年代当時の開拓移民としての視点を基に書かれており、現代の価値観から見ると人種差別的な表現が含まれていることから、人種や思想を超えた包摂性や統合、互いへの敬意や配慮といったALSCの根幹をなす価値観に鑑み、改称に至った」と述べている (国際子ども図書館, ローラ・インガルス・ワイルダー賞の名称変更)。

山田健太郎は、ワイルダーの『大草原の小さな家』について、「人種偏見に対する問題意識が現在に比べてはるかに低い社会を背景に創作された作品であるゆえに、そこには当然ながらその文化的価値が浸透しており、典型的にネイティブ・アメリカンを他者とした表象は数多く見られる。しかし、その一方で、この作品の中には、ネイティブ・

アメリカ人と共生する感情、共感する感情も織り込まれており、全体としては、かなり複雑なネイティブ・アメリカン表象となっている」(325-326)と述べている。ワイルダーのネイティブ・アメリカンについての表象が複雑となっている背景には、革新主義時代における様々な見解も影響していると考えられる。アンジェラ・フィルクス (Angela Firkus) は、1914年から1932年のウィスコンシン州におけるネイティブ・アメリカンに対する農業普及事業と同化キャンペーンについて調査した。フィルクスによれば、革新主義時代におけるネイティブ・アメリカンに対しての見解は4つあった。1つ目の見解は、同化主義であり、多くの革新主義者がこの考え方を持っていた(480)。2つ目の見解は、19世紀から続く、消えゆく人種という見方であった。ジョセフ・K・ディクソン (Joseph K. Dixon) は、1913年にインディアンは生物学的に白人より劣るので消えゆく人種であると主張した(480-81)。3つ目の見解は、インディアンは、完全に同化することはできないが、肉体労働者階級の人種として生き残ることができるという見方であった(481)。ネイティブ・アメリカンの知識人であるアーサー・C・パーカー (Arthur C. Parker) らが表明した4つ目の見解は、先住民は、社会の本流の中に身を置きながらも、文化的にはインディアンとして生き残ることができるというものであった(481)。したがって、ワイルダーの作品が、複雑なネイティブ・アメリカンの表象を含むのは、革新主義時代に存在した様々な考え方に起因する、揺らぎととらえることもできる。

具体的にワイルダーの「小さな家」シリーズの作品を見ていくと、たとえば、第3巻『大草原の小さな家』の「インディアンが家に入ってきた」(“Indians in the House”)の章の中で、ワイルダーは、ネイティブ・アメリカンの描写に「彼らの目は、ヘビの目の様に動かず黒く輝いていた」(134)、「ひどい悪臭がした」(137)、「彼らの顔は、厚かましく、荒々しく、恐ろしかった」(139)などの表現を使っている。また、登場人物であるスコット夫人 (Mrs. Scot) は、「良いインディアンは死んだインディアンだけだ」(211)と述べている。これらの表現は、前述のフィルクスによる4つの見解のうちの1つ目の、ネイティブ・アメリカンは未開人であるから教育による同化が必要であるという考え方や、2つ目のネイティブ・アメリカンは消えゆく人種であるという見方が反映されていると考えられる。一方、第6巻『長い冬』(The Long Winter, 1940)の「インディアンの警告」(“Indian Warning”)の章では、ある初冬の日、人々が集まる食料品店に、1人の老齢のインディアンが入って来て、7年に一度厳しい冬がこの地域を襲うが、その3回に1度、つまり、21年に1度は、7か月にわたる猛吹雪が続くと身振り手振りを加えながらローラの父親たちに示し、今年がその年に当たることを告げたことが描かれている(59-62)。ローラの父親は忠告に従い長い冬への備えをするのだが、実際に、インディアンの警告通り、地域の人々の生命をも脅かす厳しい冬が訪れることになる。ここでは、インディアンがヒーロー的存在として描かれ、彼らの持つ英知への尊敬の念が表れており、フィルクスによる4つ目の見解である、文化的にインディアンとして生き残ること

の大切さが示されていると考えられる。ワイルダーはまた、1894年の旅行記で、美しい大地を奪われたネイティブ・アメリカンの土地に降り立った時、「もし私がインディアンだったら、こんなに美しい土地を去る前に、もっとたくさんの白人の頭皮を剥いでしょう」(*On the Way Home* 28)とも記している。これらの表現から、インディアンに対する共感の気持ちに揺らぐ姿を垣間見ながらも、「小さな家」シリーズに、人種差別的表現が含まれているのは、女性クラブ活動の人種差別のイデオロギーや当時の価値観が作品に反映しており、女性クラブが越えられなかった人種の壁を、ワイルダー自身も克服できていなかったことによると考えられる。したがって、彼女が女性クラブから受けた3つ目の影響は、時代を背景にした戦争肯定や、分離するが平等といった主流のイデオロギーの中に身をおいたワイルダーは、そこから一歩を踏み出すことができなかったことが挙げられる。

### 3. おわりに

これまで、女性クラブがワイルダーに与えた影響について考えてきた。女性クラブが彼女に与えた影響として、大きく3つを挙げるができる。1つ目は、中年女性の大学とも呼ばれた女性クラブがワイルダーに高等教育の機会を与えたことである。高校に2学期通っただけで、卒業はしていないワイルダーであったが、女性クラブで様々な知識を得たことにより、大卒レベルの見識を持つと農業新聞『ミズーリ・リーラリスト』の読者が判断するまでに、自らを高めたと考えられる。また、女性クラブは、会長、副会長、世話係を持つ組織化された集団であり、活動が1年の見通しを持って運営されていたことから、ワイルダーは女性クラブで知識を得たばかりでなく、自ら組織を作り、それを運営していくという社会的能力をも培ったと考えられる。

2つ目の女性クラブの影響は、ワイルダーに農村のリーダーとしての成長を促したことである。ワイルダーは、巡回図書館の設立及び、農村女性のための休憩室の設立に尽力したが、これらの活動は、農村の人々の生活の向上を目指す農村生活運動と強いつながりを持っていた。女性クラブ活動により、革新主義者として公共の分野へ進出するための技術と基盤を訓練したワイルダーは、自らを社会運動の指導者として自覚し、農村のリーダーとしての役割を引き受けていったと考えられる。

3つ目の女性クラブの影響は、ワイルダーのイデオロギーの形成である。女性クラブで運営されるプログラムは、会員たちの人種や階級に対する価値を反映し、活動は人種差別のイデオロギーを支持しながら実践されており、時代の価値観を大きく反映していた。革新主義時代において、クラブ女性たちは、教育の向上や社会の向上を目指したが、経済的正義、人種的平等、女性の開放などは実現されないまま、次の世代の女性たちに残された課題となってしまった。残された課題は、ワイルダーが後に出版した「小さな家」シリーズにもその影を落とし、彼女の作品中のネイティブ・アメリカンの表象に対

する批評に繋がっている。閉鎖的な集団であった女性クラブの、時代を背景にした戦争肯定や、分離するが平等といったイデオロギーの中に身をおいたワイルダーは、そこから一步を踏み出すことができなかつた。インディアンに対する共感の気持ちに揺らぎながらも、女性クラブが越えられなかつた人種の壁を、ワイルダー自身も克服できていなかつたと考えられる。

これまで、ワイルダーと女性クラブについて、詳しく研究した先行研究はなく、本小論が、その第一歩となる。女性クラブの多くは、毎年会報を出版し、活動内容を報告していたとされていることから、ワイルダーが所属した女性クラブも会報を出していた可能性がある。もし、ワイルダーの関わったアセニアンクラブやジャスタミアクラブの会報を発掘し、その活動内容や動向を調査・分析することができれば、女性クラブがワイルダーに与えた影響をさらに詳しく知ることができ、代表作である「小さな家」シリーズの解釈に新たな一面を加えることのできる資料となる可能性がある。ワイルダーの関わった女性クラブの会報の現地における発掘及びその調査・分析を、今後の課題としたい。

（たかの ひろこ・高崎経済大学非常勤講師）

#### 引用文献

- ALA news. 2018. "ALA, ALSC respond to Wilder Medal name change." 1 Dec. 2019. <[www.ala.org/news/press-releases/2018/06/ala-alsc-respond-wilder-medal-name-change](http://www.ala.org/news/press-releases/2018/06/ala-alsc-respond-wilder-medal-name-change)>
- Anderson, William. ed. *A Little House Sampler: A Collection of Early Stories and Reminiscences*. U of Nebraska P, 1988.
- . *Laura Ingalls Wilder: A Biography*. New York: HarperCollins, 1992.
- . *Laura Wilder of Mansfield: A Life of the Author of the "Little House" Books*. 1968, 1982.
- . ed. *The Selected Letters of Laura Ingalls Wilder*. New York: Harper Collins, 2016.
- . *A Little House Reader: A Collection of Writings by Laura Ingalls Wilder*. New York: Harper Collins, 1998.
- Benton, Caroline French. *The Complete Club Book for Women*. Boston: The Page Company, 1915.
- . *Woman's Club Work and Programs or First Aid to Club Women*. Boston: Dana Estes & Company, 1913.
- Cass, Alice Hazen. *Practical Programs for Women's Clubs: A Compilation of Study Subjects for the Use of Women's Clubs and Similar Organizations*. Chicago: A. C. McClurg & Co, 1915.
- Dorris, Michael. "Trusting the Words." Booklist 89, 1993, pp. 1820-22.
- Firkus, Angela. "Agricultural Extension and the Campaign to Assimilate the Native Americans of Wisconsin, 1914-1932." *Journal of the Gilded Age and the Progressive Era*, vol. 9, no. 4, 2010, pp. 473-502.
- Fraser, Caroline. *Prairie Fires: The American Dreams of Laura Ingalls Wilder*. Pierre: South Dakota Historical Society Press, 2017.
- Hill, Pamela Smith. *Laura Ingalls Wilder A Writer's Life*. Pierre: South Dakota State historical Society, 2007.
- Hines, Stephen W. *Laura Ingalls Wilder Farm Journalist*. University of Missouri Press, 2007.
- . *Little House in the Ozarks: A Laura Ingalls Wilder Sampler The Rediscovered Writings*. Nashville, Tennessee: Tommy Nelson, 1991.

- Hobbs, Amy Laurel. "'The World, Our Home': The Rhetorical Vision of Women's Clubs in American Literature, 1870-1920." Diss. University of Maryland, 2005.
- Lang, Jennifer R. "Self-Improvement, Community Improvement: North Carolina Sorosis and the Women's Club Movement in Wilmington, North Carolina, 1895-1950." Diss. University of North Carolina Wilmington, 2005.
- Lemke, Jayme. Julia Norgaard. "Club Women and the Provision of Local Public Goods." *Public Choice Analyses of American Economic History*, 2019.
- Marcus, Leonard S., ed. *Dear Genius: The Letters of Ursula Nordstrom*. New York: HarperCollins, 1998.
- Miller, John E. *Becoming Laura Ingalls Wilder: The Woman behind the Legend*, Columbia, MO: U of Missouri Press, 1998.
- Miller, Olive Thorne. *The Woman's Club: A Practical Guide and Hand-Book*. United States Book Company, 1891.
- Muncy, Robyn. "The Ambiguous Legacies of Women's Progressivism." *OAH Magazine of History*, vol. 13, no.3, 1999, pp. 15-19.
- Parker, Alison M. "Clubwomen, Reformers, Workers, and Feminists of the Gilded Age and Progressive Era." *Women's Rights: People and Perspectives*. Santa Barbara, California: ABC-CLIO, 2010.
- Seaholm, Megan. "Earnest Women: The White Woman's Club Movement in Progressive Era Texas, 1880-1920." Diss. Rice University, 1988.
- Watson, Paula D. "Founding Mothers: The Contribution of Women's Organizations to Public Library Development in the United States." *The Library Quarterly*, vol. 64, no. 3, 1994, pp. 233-369.
- Weinstock, Tamar. "Let us Hang Up the Dishpan and the Broom": The Pursuit of Culture in the Farmers Wives' Reading-Course and The Cornell Study Clubs." Dean's Fellowship in the History of Home Economics, College of Human Ecology, Cornell University, 2009.
- Wilder, Laura Ingalls. *Little House on the Prairie*. 1935. New York: HarperCollins, 2004.
- . *The Long Winter*. 1940. New York: HarperCollins, 2004.
- . *These Happy Golden Years*. 1943. New York: HarperCollins, 2004.
- . *On the Way Home: The Diary of a Trip from South Dakota to Mansfield, Missouri, in 1894*. 1962. New York: HarperCollins, 1990.
- Winter, Alice Ames. "Women's Clubs To-day." *The North American Review*, vol. 214, no. 792, 1921, pp. 636-640.
- Wood, Mary I., Mrs. Percy V. Pennybacker. "Civic Activities of Women's Clubs." *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, vol. 56, 1914, pp. 78-87.
- . *The History of the General Federation of Women's Clubs: For the First Twenty-Two Years of Its Organization*. New York: General Federation of Women's Club, 1919.
- 国際子ども図書館 2018. 「ローラ・インガルス・ワイルダー賞の名称変更」2019年12月1日 <<https://www.kodomo.go.jp/info/child/2018/2018-080.html>>
- 高野弘子. 「『小さな家』シリーズと農村教育：『農業の教科書』と比較して」『高崎経済大学論集』, 第64巻, 第1号, 2021.
- . 「ローラ・インガルス・ワイルダーと農村教育：『ルーラリスト』の記事とリバティ・ハイド・ベイリーの農村生活運動の思想を比較して」『高崎経済大学論集』, 第62巻, 第3・4号合併号, 2020.
- デュボイス・エレン・キャロル, デュメニル・リン. 訳 石井紀子他『女性の目からみたアメリカ史』明石書店, 2009.
- 山田健太郎. 「『大草原の小さな家』におけるネイティブ・アメリカン表象」『長崎県立大学国際情報学部研究紀要第12号』, 2011, pp. 325-336.

# The Influence of Women's Clubs upon Laura Ingalls Wilder

TAKANO Hiroko

## Summary

Laura Ingalls Wilder belonged to women's clubs such as Athenian Club in Hartville and Justamere Club in Mansfield during the progressive era. What is examined in this paper is, "What kind of influence did Wilder get from these club activities?"

At that time, Wilder was writing the articles for *Missouri Ruralist* as a farm journalist. She sometimes wrote about women's clubs in the farm paper. By examining her writings and the history of women's clubs, three main influences that Wilder got from women's clubs can be clarified as follows:

The first influence is that through joining women's clubs, Wilder had the occasions of approaching higher education. Women's clubs were regarded as middle-aged women's universities. Through these clubs, Wilder learned the skills to participate in the social reform movements.

The second influence is that her participation in women's clubs helped Wilder become the rural community leader. As activities related to women's clubs, Wilder established the traveling library for the club members and the women and the children in the rural community. She also made an effort to make rest rooms for the rural women coming to the town. These activities of hers had a strong connection with the country life movement and led Wilder to become the rural area leader.

However, the third influence turned to affect Wilder, for women's clubs could not overcome some social problems. Women's clubs got a strong influence from the public opinions and ended up supporting ideas of racial discrimination. These problems of the progressive era were left to be solved. In 1935, Wilder published *Little House on the Prairie*, and some racist expressions are seen in the depiction of the story. These expressions of hers have been criticized since the 1950s and have shown that Wilder could not overcome racial discrimination and wrote her books without being sensitive. This causes her to be criticized until present.

There have not been many research papers written about the relationship between Wilder and women's clubs so far. It is said each women's club published its annual reports. Finding out the club reports of which Wilder was involved will make us know

more information about the influence of women's clubs on the author, and it will also help us understand Wilder and her books better. Researching the influence of women's clubs upon Wilder should be continued.